

日蓮大聖人御書全集

みようほうあまごぜんごへんじ

妙法尼御前御返事

いっくかんじん こと

（二句肝心の事）

新版
2098
〜
2100

みようほうあまごぜんごへんじ いくかんじん こと
妙法尼御前御返事（二句肝心の事）

こうあんがんねん がつ にち さい みようほうあま
弘安元年（'78） 7月3日 57歳 妙法尼

ほけきよう ごふしん 立 おもむき おんたず

まず、法華經につけて御不審をたてて、その趣を御尋ね

そうろう 有 難 だいぜんこん そうろう しゅみせん たほう せかい

候こと、ありがたき大善根にて候。須弥山を他方の世界

礫 投 ひと さんぜんだいせんせかい 鞠

へつぶてになぐる人よりも、三千大千世界をまりのごとく

蹴上 ひと むりよう よ きようてん う たも ひと と

にけあぐる人よりも、無量の余の經典を受け持つて人に説

聞 ちようもん どうぞく ろくじんつう 得 まっぼう

ききかせ、聴聞の道俗に六神通をえせしめんよりも、末法

今 日 頃 ほけきよう いくくいちげ 謂 たず と

のきようこのごろ法華經の一句一偈のいわれをも尋ね問う

ひと 有 難 おもむき しゃく と ひと ごふしん 晴

人はありがたし。この趣を釈し説いて、人の御不審をはら

そう

ほけきよう

し

まき

さすべき僧もありがたかるべしと、法華經の四の卷の

ほうとうほん

もう

ところ

ろくなんくい

もう

だいじ

ほうもんそうろう

いま

宝塔品と申す処に、六難九易と申して大事の法門候。今

ごふしん

むつ

かた

うち

し

この御不審は、六つの難きことの内なり。ここに知んぬ、

おんたも

そくしんじようぶつ

ひと

もし御持ちあらば、即身成仏の人なるべし。

ほけきよう

われ

み

ほつしんによらい

われ

こころ

この法華經には、我らが身をば法身如来、我らが心をば

ほうしんによらい

われ

振

舞

おうじんによらい

と

そうら

報身如来、我らがふるまいをば応身如来と説かれて候えば、

きよう

いっくいちげ

たも

しん

ひと

みな

くどく

具

この經の一句一偈を持ち信ずる人は、皆この功德をそなえ

そうろう

なんみようほうれんげきよう

もう

いっくいちげ

そうろう

候。南無妙法蓮華經と申すは、これ一句一偈にて候。

おな

いっく

なか

かんじん

そうろう

しかれども、同じ一句の中にも肝心にて候。

なんみようほうれんげきよう とな

ほとけ 成

「南無妙法蓮華經と唱うるばかりにて仏になるべしや」と、

ごふしん しよせん そうろう いちぶ かんよう はちじく こつずい そうろう

この御不審、所詮に候。一部の肝要、八軸の骨髓にて候。

ひと み ごしやくろくしやく 魂 いっしやく かお 頭

人の身の五尺六尺のたましいも一尺の面にあらわれ、

いっしやく 面 魂 いっすん まなこ うち 収 そうろう

一尺のかおのたましいも一寸の眼の内におさまり候。

にほん もう ふた もんじ ろくじゅうろつかこく にんちくでんぱた

また、日本と申す二つの文字に、六十六箇国の人畜田畠・

じょうげきせん しっちんばんぼう ひと 欠 そうら おさ そうろう

上下貴賤・七珍万宝、一つもかくること候わず収めて候。

なんみようほうれんげきよう だいもく うち いちぶはっかん

そのごとく、南無妙法蓮華經の題目の内には、一部八卷

にじゅうはつばんろくまんくせんさんびやくはちじゅうし もんじ いちじ 漏 欠

二十八品六万九千三百八十四の文字、一字ももれずかけず

収 そうろう

おさめて候。

きよう

だいもく

ほとけ

まなこ

らくてん

述

されば、「経には題目たり、仏には眼たり」と楽天もの

そうろう

き

はち

りやく

きようだい

あ

げん

べられて候。記の八に「略して経題を挙ぐるに、玄に

いちぶ

おき

みようらく

しやく

そうろう

こころ

りやく

一部を収む」と妙楽も釈しおわしまし候。心は、略し

きよう

な

あ

いちぶ

おき

もう

もん

て経の名ばかりを挙ぐるに、一部を収むと申す文なり。

いっさい

しよせん

かんよう

もう

ほけきよう

一切のことにつけて、所詮・肝要と申すことあり。法華経

いちぶ

かんじん

なんみようほうれんげきよう

だいもく

そうろう

ちようせきおんとな

一部の肝心は南無妙法蓮華経の題目にて候。朝夕御唱え

そうら

まさ

ほけきよういちぶ

しんどく

そうろう

にへん

候わば、正しく法華経一部を真読にあそばすにて候。二返

とな

にぶ

ないしひやつぺん

ひやくぶ

せんべん

せんぶ

ふたい

唱うるは二部、乃至百返は百部、千返は千部、かように不退

おんとな

そうら

ふたい

ほけきよう

よ

ひと

そうろう

そうろう

に御唱え候わば、不退に法華経を読む人にて候べく候。

てんだい ろくじつかん もう ふみ 様 しやく そうろう

天台の六十巻と申す文には、このようを釈せられて候。

たも 易 ぎよう 易 ほう そうろう まっだいあくせ

かかる持ちやすく行じやすき法にて候を、末代悪世の

いつさいしゅじよう と 置 たま そうろう

一切衆生のために説きおかせ給いて候。

きようもん い まっぼう なか のち まっせ ほうめつ

経文に云わく「末法の中において」「後の末世の法滅せ

ほつ とき じゅじ ぶくじゆ あくせまっぼう とき

んと欲せん時において、受持し読誦せん」「悪世末法の時、

よ きよう たも のち ごひやくさい うち こうせんる ふ

能くこの経を持たば」「後の五百歳の中、広宣流布して」

もん こころ とうじ まっぼう よ ほけきよう たも

と。これらの文の心は、当時、末法の代には法華経を持ち

しん 由 と そうろう

信すべきよしを説かれて候。

みようもん がく 誤 にほん かんど てんじく ほうぼう

かかる明文を学しあやまりて、日本・漢土・天竺の謗法

がくしよう

みな

ねんぶつしや

しんごん

ぜん

りつ

しようじよう

ごんきよう

の学匠たち、皆、念仏者・真言・禅・律の小乗・權教に

したが

ぎよう

ほけきよう

す

果

そうら

ぶつぼう

惑

は随い行じて、法華經を捨てはて候いぬ。仏法にまどえ

知

かたち

実

い

るをばしろしめされず、形まことしげなれば、云うことも

うたが

ごしんようそうろう

思

疑いあらじとばかり御信用 候 あいだ、おもわざるに、

ほけきよう

かたき

しやかぶつ

あだ

たま

こんじよう

いの

法華經の敵、釈迦仏の怨とならせ給いて、今生には祈る

しよがん

むな

いのち

短

ごしよう

むけんだいじよう

住 処

所願も虚しく、命もみじかく、後生には無間大城をすみか

まさ

きようもん

み

そうろう

とすべしと、正しく經文に見えて候。

きよう

だいもく

なら

よ

おお

さて、この經の題目は、習い読むことなくして大いなる

ぜんこん

そうろう

あくにん

によにん

ちくしよう

じごく

しゅじよう

じっかい

善根にて候。悪人も女人も、畜生も地獄の衆生も、十界

そくしんじようぶつ

と

そうろう

みず

そこ

いし

ひ

ともに即身成仏と説かれて候は、水の底なる石に火のあ

ひやくせんまんねん

暗

ところ

ともしび

い

明

るがごとく、百千万年くらき所にも灯を入れぬればあか

せけん

徒

ふしぎ

くなる。世間のあだなるものすら、なお、かように不思議あ

ぶつぼう

たえ

みのり

おんちから

われ

り。いかにいわんや、仏法の妙なる御法の御力をや。我ら

しゅじよう

あくごう

ぼんのう

しょうじかばく

み

しょう

りよう

えん

さんぶつしよう

衆生の悪業・煩惱・生死果縛の身が、正・了・縁の三仏性

いん

すなわ

ほつ

ぼう

おう

さんじん

あらわ

うたが

の因によりて、即ち法・報・応の三身と顕れんこと、疑い

みようほうきようりき

そくしんじようぶつ

でんぎようだいし

なかるべし。「妙法経力もて即身成仏す」と伝教大師も

しやく

そうろう

こころ

ほけきよう

ちから

蛇

釈せられて候。心は、法華経の力にてはくちなわの

りゆうによ

そくしんじようぶつ

もう

おんうたが

そうろう

竜女も即身成仏したりと申すことなり。御疑い候べか

らず。くわ委しくはげんざん見参にい入り候そうらいて申すべく候もうと申させ給そうろう
もうえ。たま

こうあんがんねんつちのえとらしちがつみつか
弘安元年戊寅七月三日

にちれん日蓮 かおう花押

みようほうあまごぜんごへんじ
妙法尼御前御返事